市民公開フォーラム「地域医療を考える～ライオン、Dr.コトー、野ウサギJr.」が10月25日、久留米市のホテルで開かれました。国内外のへき地医療に携わる医師3人が、歌やドラマのモデルにもなった最前線の取り組みを紹介し、約220人が熱心に耳を傾けました。（司会・コーディネーターは医療ジャーナリスト・藤野博史氏）

祖父から3代70年 山間地診療の明かりをともし続けたい

長野県諏訪市・諏訪豊田診療所院長
小松 佳道氏

1975年生まれ。東海大学医学部卒。諏訪赤十字病院呼吸器科副部長などを経て、2013年4月、諏訪中央病院の鎌田實名誉院長とともにさだまさしさんの歌「八ヶ岳に立つ野ウサギ」のモデルになった父・道俊さん（13年5月死去）の跡を継いで現職。

八ヶ岳に立つ野ウサギJr.

男女とも日本一の長寿で知られる長野県。祖父の卓郎が、諏訪市の山のふもとに診療所を開設し、山奥の西山地区に点在する集落への出張診療を始めたのは昭和17年（1942年）でした。

当初は馬に乗って往診し、血圧測定や減塩指導などをいち早く行いました。昭和35年（1960年）からは、市の保健活動と診療が一体化され、保健師らも一緒に行くようになりました。昭和52年（1977年）、祖父が病気で倒れ、岩手県の大学でアレルギーの研究中だった父・道俊が帰って来て跡を継ぎました。

父は、高齢化、過疎化が進むなかで、村人の暮らしと幸せをサポートする地道な診療を続けました。そして、「山間地は人間の体に例えると手足の指先。そこに暮らす人たちが元気だとその国も元気」と教えてくれました。

そんな父の姿に圧倒され、診療所を継いで1年余り。西山地区の4集落を2か所ずつ月に1回、2回に分けて訪れ、公民館などで計約60人を診ています。父はさだまさしさんから「八ヶ岳に立つ野ウサギ」という歌をいただきました。歌詞には「田舎で暮らせば、都会では埋もれてしまった生命や心の重さが見える」などとあります。祖父、父の足跡をたどりながら、野ウサギのように駆け巡って、約70年続く山間地診療の明かりをともし続けたいと思います。

●市民公開フォーラム「地域医療を考える」●

命を預かるという使命感 高齢化・過疎化が進む地域の人々を守りたい

離島の医療には本物の総合診療に携わる面白さとやりがいがある

鹿児島県薩摩川内市・下甑手打診療所所長
瀬戸上 健二郎氏

1941年生まれ。鹿児島大学医学部卒。国立療養所南九州病院外科部長を経て現職。難手術から内科、産婦人科まで引き受け、島の人を守る姿は漫画・テレビドラマ「Dr.コトー診療所」のモデルになった。著書に「Dr.瀬戸上の離島診療所日記」。

Dr.コトー診療所

医師不在で起きる悲劇を断ちたいと、当時の村長から頼まれ、離島・下甑島の診療所に赴任したのは昭和53年（1978年）です。半年間という約束でしたが、様々な出会いに魅せられて「島酔い」し、気付いたら37年目になっていました。

赴任当時の診療所は、看護師は2人だけ、手術に必須の麻酔機器すらありませんでした。新築移転して、開胸・開腹手術ができる体制を整え、当初は〝ぜいたく〟とも言われたCT（コンピューター断層撮影装置）も導入しました。

しかし、信頼されないと治療はさせてもらえません。実績を重ねて、放置すると命にかかわる胃穿孔（いせんこう）や腸閉塞などの治療も手がけ、患者さんから「命は神様に、病気は先生に」と言われるようになりました。人工透析も可能にし、本土の仲間たちの応援を受けて、島の診療所では記録的ともいえる腹部大動脈瘤の手術も行いました。

離島の医療は、いつ何が飛び込むかわからず、厳しい現実があります。しかし、本物の総合診療に携わる面白さがあり、やりがいがあります。診療所には、途上国の医師が研修に来て「都会の病院より参考になる」と喜んでくれます。国内の若い医師や学生も大勢訪れており、患者である住民とともに、魅力的な離島・へき地医療の実現につながることを望みます。